

高野長英の軌跡

中 島 善 範

九四年春から夏にかけて、不慮の事故で入院生活を送った。病院に持ち込んだ本の中に、以前、新聞連載で見た吉村昭氏の「長英逃亡」(新潮社)があり、読み終えると、私は更に詳しく調べようと数冊の本を求めた。

ご存知の方も多いとは思いますが、ここで述べようとする高野長英は、陸奥・水沢(岩手)の生まれ。一八二〇年代、全国から俊秀が集まった長崎の鳴滝塾でシーボルトに学び、当代一の蘭学者とうたわれる。

国を憂い、鎖国政策の誤まりを批判し、投獄。やがて脱獄、全国に潜行しつつ、本を書き数多くの外国兵制書の和訳を完成させた。

しかし、その評価は、一部の歴史書を除き概ね地味で、幕末の他の先覚者と比べても目

立たない。もし、これが彼の脱獄のせいだとしたら、どんなものだろうか。長英は史上最大級の洋学者弾圧事件の犠牲者であった。

近代日本の夜明け前を駆け抜けた、この異色の開明家の演じた役割は、もっと見直されていいのではないかと思う。

さて、物語は――。
一八三〇年代半ば、欧米列強の船が、しきりに近海にあらわれた。その都度、幕府は砲撃を加え退去させていた。

この外国船打ち払い令に異を唱え、長英は「夢物語」という論文を書いた。洋学者渡辺華山も「慎機論」を著わし鎖国を批判した。西洋には学ぶべきものが多いこと、鎖国は外国に侵略の口実を与えること、などを説いた。

大塩平八郎の乱などで動揺した幕府は、こうした為政者批判を許さなかった。一八三九年(天保十年)、華山は幽閉、のち自殺。長英は永牢。いわゆる蛮社の獄である。

時の目付島居耀蔵は儒学育才で、折から盛んになってきた蘭学を憎み、それにくみする幕臣の台頭に危機感をもった。そこで洋学者集団蛮学社への徹底弾圧をしかけた。

二人は無人島渡航計画に関与したとして逮捕された。だが、これは、でっち上げで、罪状の発案者は島居だった。松本清張は「天保凶録(朝日新聞社)」の中でこう断定し、「島居はそのころ老中水野忠邦の懐刀であり、警察政治の権化であった」と述べている。
予想もなかった極刑に長英は苦悩した。

死ぬまで解放されない永牢。数十人が押し込められた小伝馬町の牢内では、病人や死者が絶出し、絶望的な日々を送った。

一八四〇年、アジアでアヘン戦争が起き、中国は屈伏した。「これほど恥さらしな戦争は聞いたことがない」。英国議会でグラッドストーンは、こう演説し自国の政府を攻撃した。鎖国日本にも大きな警鐘であった。

幕府も、ようやく動き始め、江戸湾の防備を急ぎ、西洋砲術の導入に踏み切った。

長英は、自分たちが指摘してきたことが現実となったことを知り、今こそ最新の西洋事情にふれ、日本の海防体制づくりに貢献したい、と焦燥感をつのらせた。

入牢して既に五年。このまま朽ち果てたくはなかった。脱獄してでも生きのびるべきだ、と思った。火事るとき囚人を一時避難させる措置を「切り放し」といったが、それだけが唯一つのチャンスだった。

深夜、牢内が騒然とし「切り放し！」と牢役人が叫ぶ。囚人たちが、どっと外に出た。長英も走った。

脱獄はしたものの、身を安全に隠せるところはなかった。上州(群馬)から越後(新潟)へと逃避行が続く。このころ、江戸では

奉行に栄進していた鳥居耀蔵が失脚した。これを聞き長英は悔やんだ。

もし脱獄などせず、あと二カ月我慢していれば減刑の希望ももてたのではなかったか。

もう、いまは、すべてが遅すぎた。探索の目を逃がれ、直江津から故郷の水沢へ。さらに、福島、米沢に達した。

名を偽り姿を変じ、長崎時代の友人や医者仲間にも助けられての潜行だった。だが、自分が、どうしても手がけたい洋書翻訳には江戸に戻る以外に方法がなかった。危険を覚悟し江戸に入る。門人の内田弥太郎らに会い、そのすずめで、相模国足柄上郡の旧名主の家に落ち着き、望望の外国書に取り組んだ。

英仏の兵制を紹介したヘルリング、ウルベインの共著を和訳、十巻五冊とし「兵制全書」と名付けた。ミェルケンの兵書全訳も完成させ二十七巻「三兵答古知幾」とした。

宇和島藩伊達宗城、薩摩藩島津斉彬らが、これらの優れた翻訳に目をつけた。招きに応じて長英は四国に渡る。蘭学を講じ、兵書を訳し、藩の海防の設計もした。しかし、やがて、ここも安全ではなくなつた。

再び戻った江戸では、たちまち生活に困窮した。借金もかさみ、身重の妻や子どももい

たので、やむなく医者を開業することにした。薬で顔を焼き人相を変え、青山百人町で診療を始める。

十月のある夜、突然捕吏が襲った。「幕末維新人名事典」では、このとき長英自刃。吉村昭氏によれば、捕吏の十手に乱打され死亡、しかし、与力の報告には事実を隠し自殺と記されたという。四十七歳。一八五〇年のことだった。

それから三年後、ペリーの黒船が来航、幕末動乱の時代に突入する。

幕府の弾圧により、蘭学は、蛮学社にみられたような国民の立ち場でモノを考える近代的な精神を見失い、支配者に奉仕する技術だけの学問に終わる傾向を強めていった。

彼の著訳書は、これまでに、わが国初の生理解書「医原枢要」、ばれいしよの栽培をすすめた「救荒二物考」など、八十余部が発見された。歴史に刻まれた長英の軌跡は、今でも、各地に一部をかいまみることが出来る。

すさまじいまでの行動力と、時代を読む先見性。追いつめられた極限状態の中でお、蘭学をもって世に役立とうとした波乱の生涯は、人間の一生とは何かを、われわれに問いかけているようにも見える。